

キリシタン時代 の留学

東光 博英

最近、中国で遣唐使の一員であった井真成なる日本人留学生の墓誌が発見され、これに最古級の日本国号が記されていることもあって話題になっている。周知のように日本は古代より朝鮮半島や中国に留学生を盛んに送り出したが、西欧国への留学は、初めて西欧人と出会った時代に始まる。主な相手国はポルトガルやスペイン、イタリアなど南欧国であった。日本では戦国時代末期から江戸時代初期に当たる。しかし、当時の日本は幕末や明治時代のように国策として留学生を派遣していたわけではないので、日本人の渡欧はほとんどの場合、日本に広まりつつあったキリスト教が貿易に関連するものであろう。

外国の学校に在留して学ぶことを留学と言うなら、フランシスコ・ザビエルを日本に導いたヤジロウはその第1号である。ザビエル来日前の1548年、インドにあったイエズス会学院で約1年間、ポルトガル語やキリスト教を学んでいる。

二人目もヤジロウと同じく鹿児島の人でベルナルド（日本名不詳）という。渡来したザビエルから洗礼を受けて以来、終始行動を共にした人物である。彼はついにポルトガルに渡って学院で学び、ローマにまで行くが、不幸にして1557年にポルトガルで病死する。記録には彼の熱意を讃える言葉とともに、滞在中たえず病気に苦しんだとある。留学するには健康が第一であるとはいえ、風土や生活習慣がまったく異なる上に、船で他国へ渡ること自体、命がけの時代であった。

彼ら二人の留学はいずれもザビエルの勧めによるもので、特に後者についてザビエルには一つの期待があった。すなわち、宣教師の言葉を信じない日本人に、西欧キリスト教世界の偉大さを同じ日本人の彼から証言してもらうことで

あった。この期待は当人の死によって潰えるが、それから約25年後、天正遣欧使節の伊東マンショら4人の日本少年がローマまでの壮大な旅（往復8年半）を行ったのも同じことを目的の一つにしていた。

少年らはイエズス会の企画によってキリシタン大名の使節となり、西欧人宣教師に引率されて、かの南欧3カ国を旅したのであるから、留学とは言えないかも知れない。だが、彼らは事前に日本のセミナリオ（神学校）で、ラテン語や西洋音楽を学んでおり、旅の合間にもそれらに親しんだという。何よりも西欧世界を自ら訪れてその文化と風習を直接体験したのは時代を考えれば画期的なことである。否、今日でもそれは留学の本分に違いなく、文明の利器によって疑似体験の溢れる現代でこそ大事にすべきであろう。私自身、時にあることだが、400年前の宣教師の布教記録に書かれていることを現地に行ってみると、記述との一致や相違がわかるし、その場に立って初めて見出すこともある。映像や写真にしても所詮は切り取られた一部に過ぎないと気づく。また、最近は古文獻のデジタル化による保存が進んでいるが、これも実際に現物を見たり手にして得るものは少なくない。例えば4世紀も昔の紙の感触やかすかなインクの臭いを想像できるだろうか。

伊東マンショらは南欧滞在の間にかなる体験をし、何を感じたのか。彼らの旅については意外と多くの記録や文書がある。ただし、それらはほとんど使節行を企画した修道会の関係者など西洋側の記録であり、少年らの手記を基にしたという著作もあるが、彼ら自身の言葉ではなく、手記も現存しない。彼らに限らず、異国滞在の経験について、当時の日本人自らの記録が西欧人の類書に比べて乏しいのは残念だ。これから留学する人にはぜひ日記をつけることをお勧めしたい。

とうこう ひろひで

（非常勤講師・日本・ポルトガル交渉史）